# 心理学研究方法論をめぐる省察

## ― 心理学の多種多様性について ―

吉　田　章　宏

### はじめに

心理学という学問では，研究者としてその内部に立ち入ると誰もが，やがて知ることがある。それは，諸々の多種多様な心理学が並立あるいは乱立しており，それらの相互関係も不分明なありさまであるということである。本稿では，この「多種多様性」そのものを主題として論究し，「統合的心理学」の必要性と可能性の考究に備えたい。

先に発表した論考（吉田 2002）においては，「心理学における不易なるもの」の追究を通して，我，汝，誰彼という三つの心理学の可能性を指摘し，私がそれらの心理学の理念に到達した経緯と，それらの異同の概略を述べた。それを受けて執筆される本稿は，さらに，それら三つの心理学の研究方法についての論究の執筆を予定しつつ，それに向けての準備という性格をも併せ持っている。しかし，ここでは，一旦は，それとは相対的に独立な論考として，執筆することにしたい。

### 1．心理学の多種多様性

心理学においては，「流行による盛衰」が目まぐるしく，その結果として生まれた多種多様な心理学が，21世紀初頭の今日においても，そのまま我々の眼前に並存して存在している。今日では既に滅び，歴史の彼方に消え去ったものと見なされ，人々に既に忘れ去られてしまった多種多様な心理学をそれらに加えるなら，「心理学」の多種多様性は，まさに目も眩むばかりだ，と形容してもよいであろう。

英語で「心理学」の著作を著す研究者で，“The Psychology” との表題を記す者は稀である。もしそのように題して著す著者が居たとすれば，それは，その著者の視野の広さや学問の確かさを表すものと受け取るよりも，むしろ，その著者の無知，視野の狭さと傲慢を表すのではあるまいかと疑うことのほうが，より適切であろう。そこで，多くの著者は，“A Psychology” とか，端的に “Psychology” というより穏当な表現を書名に選ぶ。それらの表現は，いずれ

も，その著者個人としての「一つの視点」や「ものの見方」から，「心理学」の一つの可能性として提出しているのだ，という含意がある，と理解される。

多種多様な心理学者の一人一人がそれぞれの “A Psychology” を提出する結果として累々と集積されるのは，相互関係も直ちには不分明な多種多様な Psychologies の巨大な堆積とも言うべきものであって，その堆積たるや，多様な豊かさを内包しつつも内在的秩序をもった一つの学問的統合体と見なされうる体系的な “The Psychology” と見なすには程遠い状態にある。

この事情は，「伝統的な諸々の偏見，諸々の一面的な見方と諸々の不明瞭性」が「絶えず新しい諸々の心理学につぐ心理学へと導き，決して［確立した学問体系としての］心理学（the psychology）へとは導かない」（英訳文 “all traditional prejudices, one-sided views and unclarities, which have led to ever new psychologies but never to *the* psychology” E. Husserl, 1977 : 66.）（独原文 “allen traditionellen Vorurteilen, Einseitigkeiten, Unklarheiten ….., die zu immer neuen Psychologien und niemals zu d e r Psychologie geführt haben” 1962 : 88.）と，E. フッサールがあたかも嘆くかのように講じていた1925年当時のドイツ心理学界と，基本的な事情は，爾来，少しも変わっていないようにさえ，私には思われる。

実際，“*Psychology : A Study of a Science*”（6 volumes.）の編者の「心理学という術語で表示される諸活動の本質的な纏まりのなさ」（“essential noncohesiveness”）（Koch, 1999 : 134）についての憤りを秘めたかとも思われる嘆きの言葉は，1925年のフッサールの言葉への，70年の歳月を経て響いて来る木霊かとさえ，私には思われる。

そこで，心理学のある問題領域での心理学研究の基本的展望を得ようとする研究者の卵たちには，「・・・の諸理論」（*Theories of Perception, Theories of Learning, Theories of Personality, Theories of Development,* などなど）と銘打ったテキストが用意されているというわけである。諸理論それぞれには，個々の創始者の名前が付されており，したがって，それぞれの問題領域の心理学に専門を定めた後に，「誰それの理論」を，次から次に学習することが，研究者の卵たちには要求されることになる。前掲の S.Koch：“*Psychology : A Study of a Science*” は，その意味では，そうした一連の類書 “Theories of …….” の内でも，それぞれの理論あるいは「心理学」の創始者たち自身の執筆によるが故に，最も信頼のおけるものである。しかし，それだけに，その編者として，その全内容を熟知する結果となった S. Koch 自身による嘆きは，ますます痛切かつ深刻に響く。

具体的に列挙することは避けるが，日本においても，あるいは，米国など諸外国においても，多種多様な心理学会が存在し，それぞれにおける部会には，これまた，実に多種多様な部会が並存している。その多種多様な部会は，心理学そのものの無秩序な多種多様性を，そ

のままに表してもいる。

## 2．心理学における多種多様性の独自性

こうした状況に，私自身が疑問を抱いたのは，実は，今から40年あまり昔，1960年ごろ，私が東京大学の大学院ゼミで，大学院生の一人として，当時の依田新東京大学教授のご指導により，C. S. Hall and G. Lindzey 1957 *Theories of Personality* を諸先輩たちと学習していたときであった。編者の HallとLindzey ら自身も，全体状況に対して展望を述べるべきその終章において，諸理論が統合されるとの見通しは示さず，ただ，互いに異質な諸理論の間の「自由競争社会」における自由企業としての共存と予定調和（同上書，553）しか説いていなかったからであった。そこに提示されている状況とそれについての見方は，物理学や化学，生物学などでは，そのように，諸々の理論が，相互関係も不明瞭のまま，学習されるという状況は恐らく無いのではないか，という素朴な疑問を，心理学に無知な若い私に抱かせたのである。そして，心理学の全体については無知な当時の私は，素朴な見方から，「科学的である」との印象を受けた H. J. Eysenck や R. Cattel の Factor Analysis によるPersonality Theory に最も魅力を感じたりしたのであった。

ところで，例えば，物理学でも，確かに，古典力学，静力学と動力学，流体力学，光学，電磁気学，量子力学などと，問題領域は多様に分化している。また，同じ領域でも，例えば，素人でも知っている光の粒子説と波動説など，研究史の流れのなかで現れた諸理論が，それぞれの該当する現象に妥当すると今日でも考えられている限りにおいて，研究者の卵たちは，学ぶことを求められる。それは，単なる歴史的な理論に対する好古趣味などからでは決してなく，現実の物理諸現象の法則的知識から成る物理学理論として，真面目に受け止めて学習することが求められる。にもかかわらず，物理学については，「本質的な纏まりのなさ」を嘆く声は，寡聞にして，聞いたことがない。物理学は，全体として多種多様な内容を包含しつつも，一学問領域として確かな統一的学問像を確立している。そう，私には見えたのである。物理学には，多数の研究者によるそれぞれの創始者の名前を付した複数の “A Physics” が，無秩序に並存しているというような状況は，当時の私には全く考えられなかったからである[1]。

しかしまた，例えば，心理学に近く位置する「社会学」では，心理学の多様な諸学派に対応するかとも思われる多様な学派や流派があり，異なる学派の間では，例えば，T. パーソンズと A. シュッツの往復書簡（スプロンデル［佐藤訳］1980）にも見られるように，学問的交流による学問の基本性格に関する相互理解がどうも思うに任せない，という状況も見られるようだ。「経済学」における，近代経済学とマルクス経済学との積年の断絶と対立は，周知

の如くである。また，歴史学（例えば，カー，E. H.,［清水訳］1962）においても，文学理論（例えば，イーグルトン，T.,［大橋訳］1985）においても，同様に，諸理論が対立し，必ずしも関わりを持てぬまま，並存しているようにも，素人目には，見受けられる。

してみると，若き日の私が疑問とした心理学の上記の事情は，物理学を代表とする自然科学と，心理学のような，人文科学・社会科学あるいは人間科学との間の差異によるものなのであろうか。あるいは，物理学のような既に発展を遂げて完成度の高い学問と，心理学のような未だに発展途上にあるとされる未完成な学問との間の差異なのであろうか。

現代心理学が，その100年有余の歴史を経ても，未だ発展途上にあるのだ，とすることが許されるとするならば，現在も発展途上にある他の諸学問と同様に，多種多様な諸々の心理学を，そして多種多様な諸理論を，並存させている状況も，当然のことあるいは止むを得ないこととして許容されるべきではないか，そう反問することも，可能であろう。

仮に，自然科学には統一的学問像が可能だとしても，心理学は，純粋な自然科学でないし，人文科学・社会科学あるいは人間科学のいずれであるにせよ，統一的学問像はもてず，「本質的な纏まりのなさ」という本質的な全体的性格を，多くの他の諸学問と共有するのが，その宿命あるいは運命なのだ，とでも言うのであろうか。

しかし，それにしても，心理学においては，発展途上にある他の諸学問における未完成とは幾分性質を異にする事情があるように，私には，思われてならないのである。

それは，「心理学が研究する対象は何か？」という学問としての心理学にとって根源的とも思われる問いに対する心理学研究者たちの答えが，多種多様であり，曖昧であるということが，心理学の多種多様性が生まれていることの根底にある，という事情である。言い換えれば，同じ心理学と称する学問を専攻する研究者でありながら，それぞれの研究する心理学の研究対象については，基本的なところで，必ずしも一致していないという事情である。しかも，その研究対象についての見解の不一致が，日常の研究活動において，何ら問題となりえないほどに，この不一致という事情は，日常化し，自明化しているという事情がさらに加わる。しかも，そうした事情についての論議や検討は，現代心理学が発生した後の初期の時代においては，盛んであったように見受けられるのだが，今日では，ほとんど稀にしか見られないという事情さえ加わるのである。

心理学が多種多様なのは，多くの「心理学」が，目には直接は「見えないもの」（Invisible）あるいは「触知しえないもの」を研究対象として研究することを目指している学問だからである，と私には思われる。ただし，行動主義心理学のように，「見えるもの」（Visible）のみに研究対象を限定する「心理学」については，後述する。

「見えないもの」を研究対象とするそれぞれの心理学が，異なる構想に基づいて，心理学の研究対象を異なった仕方で思い定める，それだけの事情でも，そこから生まれるのが，相

互に関連性の不分明な諸々の心理学であったとしても，全く不思議はない，ということになる。しかし，その上，さらに，それぞれに異なった対象の思い定めに従って，それぞれに相互に異なった研究方法を考え出し，それによって研究する。そして，さらに，それぞれの異なった心理学用語や表現方法でその研究成果を公表する。そうした状況は，まさしく「バベルの塔」であって，互いに通じ合えない相互関係の不分明な諸理論が乱立するのも，むしろ，至極当然の結果というべきなのであろう。

そこに，さらに，心理学で対象としている諸現象は，日常の常識人たちが日常生活で関心を抱き，日常語で相互に語り合う事柄である場合が多いという事情が加わる。さらに，基本的には同じ諸現象を，お互いに研究しているのだとの素朴な，あるいは意図的に仕組まれた，錯覚が生じる。そして，常識人と心理学者の間，および，心理学者同士の間で，同じ概念と同じ言葉を用いて，相互に分かり合っているかのような錯覚が抱かれる。そうした錯覚あるところ，理解しあっているとの前提に基づく，相互の誤解さえも生まれ易い。そこで，実は相互関係の不分明な諸理論が，その不分明ささえも問題とされぬ。そんな風に，私には考えられるのである。

心理学諸理論の間の相互関係が不分明である，と私は述べた。しかし，仮にもし，研究者たちのそれぞれが，「見えないもの」ではあっても，他の研究者たちと同じ研究対象を，多種多様に理論化しているのであると信じることが出来たとするならば，どうであろうか。つまり，研究対象は同じであって，それぞれの研究方法や理論化の仕方が互いに多少異なるだけなのだ，と信じることが出来たとするならば，どうであろうか。すると，心理学の諸理論の相互関係という問題は，あるいは，比較的容易に解決し消滅するかもしれない。諸理論の相互関係は，同一の対象への異なる接近による，多種多様な対象像である，といういわば常識的な解決が成立しうるであろうからである。つまり，同一の対象についての，いわば多種多様な対象像あるいは「射影像」として，多種多様な心理学が並存していると，理解されうるからである。もちろん，それら諸接近と諸対象像の相互関係の問題としては，残るであろうが，それは，光の存在そのものと光の現象とについての見解の一致という基礎の上に構築される，光の粒子説と波動説，の間の関係ほどの問題にすぎないであろう。もしそうならば，多様な対象像の統合として「統合的な対象像」も，さらには，「統合的な心理学」も，将来は，形成可能であるかも知れない。が，現実には，そうはならない。

心理学の研究対象が「見えないもの」であるとする。すると，これまでの心理学の状況は，ちょうど，X線（レントゲン線），内視鏡，CTスキャン，による診察法が発見・発明される以前の医学の状況に，なぞらえることもできよう。しかし，医学の場合は，見るべき患部の状態については，歴史的には，それらの診断方法が発見・発明される以前から，既に可能であった病死体の解剖によって，「見えるもの」となる可能性を有する「研究対象」像が，研究

者の間で既に形成され共有されていたに相違ない。X線，内視鏡，CTスキャンなどは，病死後ではなくて，生きた生体の疾患を生きたままその場で観察できるというところに，その画期的な意義があったのであろう。これに対して，心理学の場合は，まず，医学の場合のような解剖による観察が原理的に不可能であり，さらに，投影法，催眠法，心理テスト，眼球運動をとらえるアイ・マーカーにせよ，X線，内視鏡，CTスキャンに相当するほどの透視技術ではなく，したがって，何時までたっても決して「見えない」研究対象が設定されるに留まる場合が多いのだ，と考えられるのである。

「見えないもの」を研究対象としてそれぞれに研究して，それを論じ合う心理学研究者たちが，それぞれに競い合って，それぞれの理論を創始し，しかも，実は，そもそもそれぞれに異なる対象を研究している可能性があることを考えるならば，結果として，そのような状況から生まれ乱立する諸理論の相互関係が不分明となるのは，これまた至極当然と言わなければならないであろう。それは，あたかも，インド古来からの寓話「群盲象を撫でる」を思わせる状況である。「群盲象を撫でる」は，象を撫でている盲人たちの視点からの言葉ではなくて，その状況を見ている目の見える人物の視点からの言葉である。その意味では，多種多様な心理学乱立の状況は，この諺に沿って言うならば，そのように言明する目の見える人物が居らず，したがって，その全体状況が「群盲象を撫でる」という状況になっていること自体が，象を撫でている盲人たちに相当する心理学研究者同士の間では，自覚されてないという状況にも，なぞらえることができよう。

## 3．内観心理学から行動主義へ，そして・・・

そうした混乱の状況に，いわば「業を煮やして」登場したのが，心理学の対象を「見えるもの」としての観察可能な「行動」に限定して心理学を「科学」することに狙い定めたワトソンであった，と言えるであろう。ワトソンは，その名著「行動主義」（*Behaviorism*. 1959／1930改訂版）において，以下のように書いている。「アメリカの心理学では，対立する二つの見方が今なお盛んに行われている。それは，内観心理学，つまり主観的心理学と，行動主義，つまり客観的心理学である。1912年に行動主義が登場するまで，内観心理学が，アメリカの大学の心理学を完全に支配していた。・・・・［ティッチナーとジェームズの内観心理学は，共に］心理学の主題は意識だ，と主張した。／行動主義は，これとは逆に，人間の心理学の主題は，人間の行動（the behavior of human being）だ，と主張する。行動主義は，意識というものは，明確な概念でも，有益な概念でもない，と主張する。つねに実験家として訓練されている行動主義者は，さらに，意識というものがある，という信仰は，迷信と魔術のあの大昔に生まれたものだ，と主張する。」（Watson, 1959/1930:1-2：ワトソン［安田訳］1968:

15-16 下線は引用者）

行動主義の誇らしくも高らかな宣言である。ここで，注目しておきたい点が 5 つある。すなわち，第一に，Watsonが，「人間の心理学 (human psychology)」の主題と書いて，「人間の」心理学ということを，強調していることである。内観心理学については，「心理学の主題は意識だ」と紹介しながら，行動主義については，「人間の心理学の主題は，人間の行動だ」と，対比させて，「人間の」ということを強調していることである。これは，内観心理学が「人間の心理学」であることは自明のこととした上で，人間を動物と同じように研究する行動主義も，その点では，同様で，決して動物の心理学に限定されているわけではないのだということを，ことさらに強調したものであろう，と理解される。そして，第二に，ここで，心理学の主題の，「意識」から「行動」への変更が提案されていた，ということである。研究主題が，つまり，研究対象の変更がされても，果たして，同じ「心理学」であると言えるものかどうか，これは，少なくとも，慎重に検討されなければならない点であろう。第三に，それにもかかわらず，Watsonは，行動主義を「アメリカの心理学」における二つの見方（Two opposed points of views）のうちの一方の見方として，自ら性格付けている。しかも，両者の違いを，研究対象の違いであると同時に，「見方」（points of views）の違いとして，提示していることが殊に注目されるのである。つまり，ワトソンは，ワトソンの行動主義の提唱を，研究対象の「意識から行動へ」の変更による心理学からの離脱としてではなく，「心理学」のなかの「ものの見方」の変更として，自己呈示しているのである。第四に，行動主義は，それが登場する以前の，良かれ悪しかれ，内観心理学の完全な支配に対抗するものとして，つまり，旧勢力に対する新勢力として，登場した，とWatsonが自覚し自己呈示していたことである。そして，第五に，「行動主義は，人間の適応自体の分野全体を扱う自然科学である。そのいちばん親しい科学上の友人は，生理学である。」（同前書，p. 27）と，行動主義を，生理学と友人関係にある「自然科学」として「定義」していることである。Watsonは， われわれが問題としてきた「心理学の多種多様性」について，次のように述べている。「意識のようなものがあり，またそれは内観によって分析できる，という大前提の結果，個々の心理学者の数と同数の分析があることになる。そこには，実験的に心理学上の問題に取組んで，それを解決する手段もないし，多数の方法を標準化する手段もない。」（同前書，p. 19－20）と。つまり，意識を研究対象としたがために，多種多様な分析が生まれ，標準的な研究方法が生まれず，その結果として，Watsonの時代における彼の目に映る「心理学の多種多様性」が生まれたのだ，と指摘したものと理解してもよいであろう。逆に言えば，Watsonの提唱する行動主義によって，心理学は「自然科学」となり，研究の方法は標準化され，「心理学の多種多様性」は克服され，一つの心理学が，言い換えれば，“The Psychology” が，学問としての友人である生理学のように，自然科学として，確立される，というのが，Watsonの主張であり，また，

彼が行動主義に賭けた夢と理想でもあった，と理解される。

しかし，もちろん，直ちにいくつもの疑問が湧き上がってくるであろう。そもそも，研究対象を，「意識」から「行動」へと変更しても，同じ学問「心理学」であると果たして言えるのだろうか，という疑問である。このことは，新しく誕生した「行動主義」が，学問として，あるいは，一つの科学として，成り立ちうるかどうか，という問題とは全く別の問題である。そうではなくて，「行動主義」は，そのような研究対象の変更にもかかわらず，それまで「意識」を研究対象として追究してきた「心理学」の一形態であると言えるか，という疑問である。「行動主義」の出現によって，「心理学」は，それまで研究していた「意識」を捨てて，新たに「行動」を研究することになるのであろうか。意識を研究していた「心理学」は，「行動主義」の出現で，消滅すべきであったのだろうか。

そもそも，それまでの心理学が研究対象としていた「意識」の存在を否定し，その研究を放棄し，あらたに，「行動」を研究対象とする「行動主義」を創始し，それと「心理学」をつなげて，「行動主義的心理学」と名づけるのは，少なくとも，形容矛盾だったのではないだろうか，という疑問も生まれてくる。もっとも，行動主義は，後年展開される「行動科学」の内部における「心理学」として，相応しい位置を見出すことになる。

さて，私の素朴な疑問に戻ろう。果たせるかな，その後の長年にわたる歴史の経緯は，「行動主義」は，意識と内観は極力回避しつつも，「見えないもの」としての「仮定的過程」や「仮説演繹的構成概念」を，すなわち「内的諸過程」や「媒介諸過程」などを，理論的に積極的に取り入れる，C. Hull, E. C. Tolman, C. Osgood らの「新行動主義」の心理学の展開へとつながって行った。これらの展開は，Watson の厳密な行動主義の立場から見れば，恐らく，進歩というよりも，むしろ「行動主義」からの逸脱あるいは堕落として映ったであろうし，内観心理学，意識心理学の立場から見れば，行動主義の側の中途半端な妥協として映じたことであろう。その中に在って，「厳密な行動主義」的「心理学」あるいは「行動科学」へとつながって行った B. F. Skinner は，「行動主義」の原則を徹底して貫いたと言う点で，好悪は別として，まことに見事である。しかし，妥協に向った「新行動主義」の諸流派も，「行動主義」に抵抗する新勢力として登場したという点では，「行動主義」が「内観心理学」に対したとき程の急進性はなかったにせよ，「抵抗する新勢力」であった点では，同じだった，とも考えられる。

そして，さらに，時代を下って，1960年代，「新行動主義」に抵抗する新勢力として，コンピューター科学の発展にも刺激されて，「認知過程」を中心に据え，「メタ認知過程」として，「意識」や「自己意識」に相当する過程さえも視野に入れた，新しい装いの「認知心理学」が登場する。当時，新行動主義の立場からは，「認知心理学」は，流行おくれの意識心理学とゲシュタルト心理学への回帰である，との風評もしばしば聞かれた。が，ともかく，最盛を

誇っていた「新行動主義」を次第に凌駕するに至り，学界では，一つの新勢力として今日の隆盛を見るに至っている。

思えば，以上の経緯も，心理学における「流行による盛衰」の長い歴史の一端である。

## 4．共時的見方と通時的見方の統合

今日の「心理学の多種多様性」という状況は，以上のように考えてくると，今日の目だけから見て，ただ単に「多種多様」の心理学の混沌だととらえる見方では不十分だ，ということに，次第に気づくようになる。歴史的な経緯を背景において見るならば，多種多様なそれぞれの心理学は，それぞれの創始の時点においては，それぞれなりの状況のなかで，それぞれの理由をもって，それ以前の心理学，ことに直前の心理学に対する批判から生まれた「抵抗する新勢力」だったのである。例えば，Watson が批判し否定した Wundt とその流れを汲む E. B. Titchener やW. James の意識心理学にしても，さらにそれ以前の哲学的な「安楽椅子心理学」と当時見なされた心理学に対する批判と抵抗から，経験的で実験的な心理学を目指して生まれた「抵抗する新勢力」であったことは，広く知られている。しかし，そうした「新勢力」は，その直前の心理学に対する批判と抵抗のみから生まれる場合，従って，比較的短期的な展望から生まれる場合，人間の心へ洞察の，人類の長い多様な歴史の長期的展望から生まれたものではないことになる。それぞれにとっての「直前の心理学」だけが問題とされて来る場合，服飾における流行にも似て，長期的に見れば，「長い後には短く，短い後には長く」というにも等しい，「意識の後には行動，行動の後には意識」という右往左往を生み，その結果として，激しい「流行による盛衰」ともなり，その歴史から「本質的な纏まりのなさ」を露呈する心理学の「多種多様性」を生んでいるのだ。そのように私は考えるに至った。

さて，そこで，現在の時点で，我々に比較的接近が容易な心理学として与えられているものの集まりを，いわば空間的に同時的に眺めるときには，現況は「多種多様な心理学」の並立あるいは乱立としてしか映らないかもしれない。が，それらがそれぞれに創始された時代に遡って，それぞれの心理学をそれぞれの時点において生きた人間の視点に立って，いわば時間的に歴史的に共に流れを下りつつ眺めるならば，それらは，相互に，多かれ少なかれ相互に影響しあいながら，そして，直接的には，創始者が，少なくともその「直前の心理学」に対しては，その批判あるいは反抗として，あるいは，さらに発展させた仕事として，創始されたものであることが，見えてくる。そのように眺めてみると，それぞれの，その時々の創始者の思いが立ち現れてきて，並立とか乱立としか見えなかったものが，自ずから，時間的な流れの秩序の中に，位置づけられてくることがわかる。

言い換えれば，(A) 現在に定位した空間的な共時的な見方からは，多種多様な心理学の並立や乱立と見えるものが，(B) それぞれの創始者がそれぞれの心理学を創始した時点に遡り，それぞれの時点に定位する時間的な通時的な見方からは，多種多様な心理学のそれぞれが，それぞれの心理学から見た，長短の差異はあれ，ある歴史的展望のもとに位置づけられて，生きた歴史の流れとして，ある秩序をもって見えて来る，ということである。諸々の心理学の創始を『時間と物語』（リクール）に位置づけて，それぞれに即して内在的に読むならば，並立と乱立の混乱の世界に，ある物語的な時間的秩序が出現するであろう，ということである。とはいえ，多くの心理学が「短期的展望」のもとに創始されたという特徴をもつことは，忘れてはならない。さらに言うならば，現在の時点から見る場合でも，以上のような多様な見方の数々を，通時的に意識して眺めるならば，多種多様な諸々の心理学全体は，極めて複雑で内容豊富な全体として，しかし，決して混沌ではなく，ある秩序をもったものとして，出現することであろう。

ここで，空間と時間，歴史と地図を連想するならば，年表あるいは年代記としての「時間的統合的心理学」あるいは，「もろもろの心理学から成る心理学全体の発達・歴史論」と，地図あるいは宇宙模型としての「空間的統合的心理学」，あるいは，「もろもろの心理学から成る心理学全体のシステム論」を構想することも考えられよう。

さて，以上のことに関連して，心理学の分野では，これまで，心理学の歴史の研究と教育が軽んじられてきた，という事情が，直ちに浮び上がってくる。これは，少なくとも，1980年当時の Duquesne 大学心理学科の A. Giorgi 教授によれば，米国の大学院教育において広くそうであった，という。そして，日本においても，同様であった，と私には思われる。自然科学を理想とする心理学においては，心理学研究者たちは，最近の最先端の研究に関心を集中しており，それが，研究者としてのあるべき姿である，と思い込んでいるらしい。例えば，アリストテレス，あるいは，ヴント，ブレンターノ，ディルタイ，フッサールの原典を，あるいは，空海，道元の原典を，さらには，ティッチナー，あるいは，ワトソンの原典を，学ぼうとする現役の心理学研究者は，今日では極めて稀である，と言っても恐らく大きな間違いはないであろう。その点，今日でも広く読まれているフロイトの原典あるいはゲシュタルト心理学の諸原典は，その例外かとさえ思われる。

## 6．「ものの見方」（Point of View）と「素材内容」（Subject-Matter）

ヴントの直弟子で，米国コーネル大学で心理学科を開き，米国の心理学会で非常に権威ある立場を占めたと伝えられる Oxford 大出身の英国人 Edward Bradford Titchener（1867-1927）は，その最晩年に，長年の理論的研究の集大成として，「体系的心理学」“*Systematic*

*Psychology: Prolegomena"*（1972/1929）を著している。この著作は今日でもなお読むに値する，と私は確信している。それは，著者が，心理学が科学となるために，心理学を他の諸科学との関係において，如何なる意味で独自な存在理由をもちうるか，という問題を立てて，それまでの草創期の心理学における学問としての心理学の「定義」を，当時現われた多種多様な心理学者の立論を網羅しつつ，Titchener 自身の立場も敢えて隠すことなく，理論的に整理して，詳細に論じている著作だからである。

その冒頭の序章では，ブレンターノとヴントを心理学についての，二つの構想の代表者として公平に提示して，心理学は，そのどちらの道を進むべきかを，読者に問うている。ブレンターノは経験心理学を唱道し，フッサールにつながり，後のゲシュタルト心理学，あるいは，現象学的心理学へとつながって行く。他方，ヴントは，言うまでもなく，いわゆる心理学における正統派の科学的な実験心理学の始祖とされている人物である。

その Titchener が，同著で，科学としての「心理学」についての多様な「定義」を整理して論じている。心理学は，先にみたように，今日においてさえ「本質的な纏まりのなさ」を指摘されている位であるから，その「定義」は，決して容易ではない。その事情は，当時と今日とで，少しも変わっていない。わき道にそれるが，例えば，「心理学とは，心理学者たちが，自分を心理学者であると言っているときに，彼らがしていることである」（Wertheimer 1972：5）という有名な冗句（ジョーク）がある位である。

そこで，Titchener は，それまでの心理学の草創期の歴史において，心理学とは，他の諸科学と区別される独立した科学として，如何なる本質的特徴を持つか，との問いに答えようとして論じた幾多の代表的心理学者たちの議論を集約したのである。そこで，「定義」の仕方に二つの仕方があることを指摘し，その両者を詳細に展開し紹介している。最晩年の仕事として，この仕事を選んだことのうちに，彼が，心理学に対して，「体系的な心理学」となって欲しいとの強い願い，しかし，満たされなかった願い，を抱いていたことが伺われるように，私には感じられる。さて，彼の言う二つの仕方。その一つは，心理学の独自な特徴は，他の諸科学と比べて，その「ものの見方」（Point of View）にあるとするものである。この見解によると，例えば，物理学，化学，生物学も，実は，もともとは，心理学と同じ素材である「経験」から出発する。ただ，それぞれ独自な「ものの見方」に従って，心理学は心理学に独自な「ものの見方」によって「経験」を研究する。そのことによって，諸科学の間に分化が生まれる，という。こうした考え方の例として，ヴント，マッハ，アヴェナリウス，ウオード，キュルペ，エビングハウス，「純粋経験」のジェームズ，などの所論が紹介されている。これ読むと，レーニンの『唯物論と経験批判論』の激しい口調の批判が，ふと想起される。さて，もう一つの仕方は，心理学は，他の諸科学とは異なる「素材内容」（Subject-Matter）を有する，とするものである。この見解にも多種多様あって，例えば，「内的世界と外的世界」

のうち，「内的世界」が心理学の領域である，とする見解。人間経験の世界は「延長をもつ」物質（matter）と「延長をもたない」心（mind）とに分かれ，心理学の素材は後者である，とする，デカルトにその起源をもつ見解。あるいは，経験の世界は，「意識的」と「無意識的」の二つに分かれ，心は「意識的現象」と同一視できる，とする見解。さらに，「機能心理学」（functional psychology）と「行為心理学」（act psychology）。こちら側の見解の心理学としては，ラッド，ブレンターノ，ミュンスターベルク，シュトゥンプ，リップス，意識の本質をその「志向性」にありとした現象学の始祖フッサール，メッサーなどの所論が，批判的に紹介されている。その議論の詳細は，原著に譲るほかない。

現象学のフッサールは，その著『現象学的心理学』において，まさしく，心理学独自の「素材内容」は何かを問い，内在的なものを開示する「現象学的還元」によって得られる「純粋に心理的なもの」，「心理現象」の領域（Husserl　1977: 144; Husserl　1962: 188）こそが，それであると論じている。したがって，「現象学的還元」の方法なしには，心理学はそもそも成立不可能であるということになる。言い換えれば，「ものの見方」である「現象学的還元」と「素材内容」である「心理現象」は，少なくともフッサールの見解に依れば，不可分なのである。

ともあれ，心理学の独自性の特徴づけが，これら二つの仕方，「ものの見方」と「素材内容」を定めること，によってなされる，という指摘の重要な意味は，ここで指摘しておかなくてはならない。

全くの素人，あるいは，心理学の初心者であれば，心理学は，当然，「心」を研究対象とする学問，科学であるに違いない，と考えることであろう。しかし，以上見たように，事柄はそう簡単ではないのである。というのは，そもそも「見えないもの」である「心（こころ）」を研究対象とする心理学は，その研究対象「心」の確定が，容易ではないという第一の困難が，まずある。さらに，その確定は，実は，その研究の出発点である「経験」をどのように「見る」か，その「ものの見方」に依存しているという第二の困難が加わる。従って，心理学の独自性は，最初から与えられている，その学問の対象の独自性によるというよりも，むしろ，その対象である「心」をそこから抽出してくるべき「経験」をとらえる「ものの見方」の独自性によって，特徴付けられる，ということにもなる。ことに，すべての諸科学の出発点は，人間の「経験」にあり，それをどのように扱うかによって，それぞれ独自な諸科学へと分化して行くのだ，とする「経験批判論」のような観念論の立場からは，科学としての心理学の特徴づけは，このようにならざるを得ないのである。

ちなみに，弁証法的唯物論の立場の標準的教科書には，心理学は，次のように定義されている。すなわち，「心理学とは，脳の機能であり，客観的現実の反映であるところの心理現象にかんする科学である。」（スミルノフ［柴田他訳］1959: 11）。この文章を収めている第一章

の執筆者は，他ならぬ，エス・エリ・ルビンシュテインである。ここでは，まず，心理学の研究対象を「心理現象」として確定し，しかも，その基本的な本質的特徴を「脳の機能」であり「客観的現実の反映」である，としているところに，観念論の立場からの，「心理学」定義の諸々の試みとの基本的な相違を見ることができる。が，このことはしばらく置く。

フロイトも書いているように，「科学というものは，厳密に定義された明晰な基礎概念の上に構築すべきであるという主張が，これまで何度も繰返されてきた。しかし，実際には，いかなる科学といえども，もっとも厳密な科学といえども，このような定義によって始まるものではないのである。」（フロイト［中村訳］1966: 11）。

心理学は，その定義そのものからして，多種多様である。したがって，「心理学」と「定義」の相互間の前後関係や因果関係は別としても，いずれにせよ，心理学そのものの多種多様性は，認めざるを得ないのだ，ということが，明白になれば，ここでは足りる。

## 7.「見えるもの」　と　「見えないもの」

心理学の課題は，「見えないもの」である「心（こころ）」を「見えるもの」と化し，さらに，その「見えないもの」でありながら「見えるもの」となった「心」の「理（ことわり）」を「見えるもの」と化することである，と私は考える。その場合，原理的に「見えないもの」である「心」の存在を否定することは，心理学の存立基盤そのもの否定することである。もっとも，その「存在」の在り様は，根本問題となる。「見えるもの」である人間の「行動」が，「心」から離れては存在し得ないことが，「見えないもの」を研究対象とするはずの「心理学」が「行動」研究することを根拠づける。また，「行動」を研究することによって，「見えないもの」である「心」を明らかにする限りにおいて，その研究は「心理学」なのだ。しかし，「心」の存在そのものを否定して，心理学の研究対象を「見えるもの」に，例えば「行動」のみに限定することは，「心理学」そのものの存在理由を否定することを意味する。が，さらにしかし，その根底に「見えないもの」である「心」への追究が秘められている限りにおいて，そうした限定は，「心理学」の極端な在り方の一つとして，容認することができる，とも考えられる。しかし，もし，厳密に「行動」のみに限定される学問あるいは科学が構想される場合は，それは，もはや「心理学」ではなくて，例えば，「行動学」であろう。ここでは，「行動学」の成立可能性を問うているのでもその価値を否定しているのでもなくて，それが「心理学」であるかどうか，「心理学」と称することの妥当性，を問うているのである。もっとも，「行動学」の側からの「心理学」への接近もありうる。「見えないもの」としての「心」と「心理」を含めて研究する「行動学」は，逆に，「行動学」の極端な在り方の一つとして，「心理学」と次第に連続化し，部分的には，融合するであろう。「行動」と「心理」あるいは

「意識」および「無意識」の間の，連続化と不連続化には，以上のような弁証法的関係がある。

メルロ＝ポンティは，その著『見えるもの と 見えないもの』(1989) で，「見えないもの」について，次のようなノートを遺している。「1.今のところは見えないが，見えることのありうるもの(物の隠れた面ないし今は見えていない面－隠れている物,『どこか別のところ』にある物－『ここ』と『どこか別のところ』)。2.見えるものと関わりはあるが，にもかかわらず物としては見られえないもの（見えるものの実存範疇，見えるものの諸次元，その具象化されえぬ骨組)。3.触覚的ないし運動感覚的にしか存在しないもの。4.[語られること]，コギト［われ思う。]」(同上書:377-378)。人間の「心」は，「われ思う」を含み，「今のところ」だけではなく，本質的に「見えないもの」である。意識心理学では，内観により，本人には，そして，本人にのみ接近可能である，としていた（ティチェナー ［岡田訳］ 1929：35)。しかし，その見えない「心」は，ある時には，「心」の持ち主本人の意図的・自覚的・意識的な「表現」として，また，ある時には，無意図的・無自覚的・無意識的な「流露」として，表出される。ここで，意図的・自覚的・意識的「表現」と無意図的・無自覚的・無意識的「流露」の間には，不連続性と連続性があり，相互転化がある。しかも，その「表現」や「流露」は，その「心」と単純な一対一対応をなしてはいない。もし敢えて言うならば，それらは，時間の流れとともに流動的かつ力動的に，双方向的に，一対多対応を成している。そこに，「表現」や「流露」と「心」との単純な同一視は全く不可能となり，心理学特有の課題の複雑さが生じる。それ故にこそ，常に理解や解釈や洞察が必要となってくる。しかも，その理解や解釈や洞察，推理・推測，には常に多義性が伴う。フロイトの活躍の場が現われる。理解や解釈や洞察などの多義性と多様性は，以上の事情の本質的で必然的な結果なのである。さらに，その上，後述のように，心理学の発展と深化そのものが，多義性を一層増大させる。多様性と多義性は，いわば，心理学において自己増殖する。そこに，心理学の果てしない研究課題が常に新たに発生する。しかしまた，にもかかわらず，常識を超えた深さと鋭さと豊かさを備えた，信頼に値する学問的な心理学への期待と希望と渇望が生まれる。「表現」と「流露」と「心」との間の双方向的な一対多対応があるからこそ，現実の生きた人間生活における，極めて人間的諸現象が生まれるのではないか。すなわち，思いつくままに挙げても，嘘，虚偽，騙し，欺瞞，詐欺，冤罪，陥れ，裏切り，虚勢，振り，知ったか振りと知らぬ振り，見て見ぬ振り，誤解，善意の誤解と悪意の誤解，誤解の解消，不信，相互不信，不信の増大，信頼，信頼の回復，全幅の信頼，希望と期待，幻滅，失望，絶望，洞察，秘密，秘め事，隠匿，密約，思いやり，甘え，隠忍，忍耐，陰徳，比喩，譬え，諺，虚構，芸術，などなど，極めて人間らしく興味尽きない諸現象が生まれるのである。「心」が「見えないもの」であるから心理学が成り立たないのではなくて，むしろ，「心」が「見えないもの」であるからこそ，

心理学が必要とされ，心理学の魅力が生まれるのだ。

「心理学」の，いやしくも「心理学」（Psychology）という名前に相応しい在り方は，「見えないもの」である「心」を，その「現われ」としての多種多様な「見えるもの」，例えば，流露，表現，行動，行為，動作・・・などの理解・解釈・洞察・推理・推測・・などを通して「見えるもの」としてとらえること，さらには，「見えないもの」である「心」を「見えるもの」とするさまざまな工夫・発見・技術・方法により，「見えるもの」としてとらえることにより研究し，「見えないもの」としての「心」の「理」，その意味と構造と機能などを，明らかにするという果てしない課題に取組むことである，と私は考える。

## おわりに

「統合的心理学の必要性と可能性」を論ずる前提として心理学の多種多様性を論じ始めて，予定の紙幅を超えた。論じ残した諸論点は，次の機会に譲る。おわりに，私が深く共感する以下の文章を引用し，今後に続く議論の展開への糸口としたい。“I have had the growing realization over the past few years that the problem of man’s knowledge is not to oppose and to demolish opposing views, but to include them in a larger theoretical structure.”（Becker, Ernest, 1973: xi）

### 引用文献

Becker, Ernest. 1973 *The Denial of Death.* Free Press
カー，E. H., 1962 清水幾太郎訳『歴史とは何か』岩波書店
イーグルトン,T., 1985 大橋洋一訳『文学とは何か：現代批評理論への招待』岩波書店
フロイト，S., 1996 中村元訳『S. フロイト自我論集』ちくま学芸文庫
Hall, C. S and Lindzey, G., 1957 *Theories of Personality.* Wiley
Husserl, Edmund. 1962（herausgegeben von Walter Biemel） *Phaenomologische Psychologie.* Martinus Nijhoff
Husserl, E., 1977（translated by John Scanlon） *Phenomenological Psychology.* Martinus Nijhoff
Koch, Sigmund. 1999 *Psychology in Human Context.* The Univ. of Chicago Press
メルロ＝ポンティ，M. 1989 滝浦静雄/木田元訳『見えるものと見えないもの』みすず書房
スミルノフ主監 1959 柴田義松・島至・牧山啓訳:『ソヴェトの心理学I』明治図書出版
スプロンデル，W. M. 編 1980 佐藤嘉一訳『社会理論の構成：社会的行為の理論をめぐって』木鐸社
ティチェナー,E. B., 1929 岡田亀次郎訳 『心理学概論』理想社
Titchener, E. B., 1972/1929 *Systematic Psychology: Prolegomena.* Cornell Univ. Press.
Watson, John B., 1959/1930 *Behaviorism.* The Univ. of Chicago Press
ワトソン，J. B. 1968 安田一郎訳『行動主義の心理学』河出書房新社
Wertheimer, Michael., 1972 *Fundamental Issues in Psychology.* HRW

吉田章宏　2002 「心理学方法論をめぐる省察：心理学の人称性；我，汝，誰彼の心理学」
『淑徳大学研究科紀要』第 9 号，43-56

**注**

1）物理学においても，素粒子論の領域において，唯物論と観念論の原理的な対立が存在していることを知り私が衝撃を受けることになるのは，雑誌「唯物論研究」所載の坂田昌一執筆の論文によってであり，それは，しばらく後になってからのことであった。

# A Meditation on the Research Methodology in Psychology:
## On the Diversity of Psychology

Akihiro YOSHIDA Ph. D.

The theme of this paper is the diversity of psychologies and its unique nature, in distinction from the similar diversity observed in other sciences. A novice psychology student would be perplexed with the diversity of various psychologies, many of which are named after the originator of each one. The same kinds of diversity might also be observed to exist in other disciplines. However, the diversity in psychology is unique in its nature, in that psychologists disagree among themselves on the very research object of their discipline: either behavior or experience, for instance. This disagreement carries over also to the disagreement on the major research methodologies and methods among different "schools" of psychologies: e. g., behavioristic and/or introspective psychologies.

The author at first asks the question as to whether those diverse psychologies really belong to a single discipline, while they openly declare that the research objects are mutually different. This uniqueness of diversity originates from the fact that the object of psychology, "psyche", is essentially "invisible". Thus, the "invisible" is either abandoned or retained. Could the diversity of psychologies be compared to the well-known allegorical situation of blind people discussing over their own explorations of a supposedly identical elephant ? No, since a psychologist has no other way than to choose his/her "Point of View" and " Subject-Matter" *simultaneously,* facing the" Subject-Matter" never "visible". Thus, the explication of the nature of our subject-matter is urgently needed. The challenge of our discipline of Psychology, in this author's viewpoint, is to accept this very difficult task and project of grasping the "invisible" and its "logos" through the "visible", while activating and including all the diverse, past and present, also actual and possible, psychologies, into a larger theoretical structure. A further exploration into such a theoretical structure is to be expected.